

企画展「拵—井伊家伝来刀装選—」展示作品リスト

番号	指定	作品名称	数量	時代	備考
1. 大名家の拵					
◆歴代の指料—大小拵・正式拵・替拵—					
1	重要文化財	おんだいだいおんさしりょうちよう 御代々御指料帳	1冊	江戸時代後期 文化9年(1812)	彦根藩井伊家の初代直政から13代直弼までの指料とその刀装を載せる。
2		くろろいろぬりきやだいしやうごしらえ 黒蠟色塗鞘大小拵	1腰	桃山時代 ～江戸時代初期	初代直政の所用と伝える。
3		くろろいろぬりきやだいしやうごしらえ・あいきがたごしらえ 黒蠟色塗鞘大小拵・小さ刀拵	1腰	江戸時代	13代直弼の所用と伝える。 正式拵。
4		くろいぢいぢぬりきやだいしやうごしらえ 黒いぢいぢ塗鞘大小拵	1腰	桃山時代 ～江戸時代初期	2代直孝の所用と伝える。
5		しゅうろしぬりひるまききやだいしやうごしらえ 朱漆塗蛭巻鞘大小拵	1腰	桃山時代 ～江戸時代初期	4の替拵。
6		くろろしぬりかいらぎざめどきだしきやだいしやうごしらえ 黒漆塗梅花皮鮫研出鞘大小拵	1腰	江戸時代後期	12代直亮の所用と伝える。 替拵。
◆儀仗の拵—太刀拵—					
7		きんなしぢちばなもんちらしきやえふだちごしらえ 金梨子地橘紋散鞘衛府太刀拵	1腰	江戸時代中期～後期	
8		きんひらめぢきやほそだちごしらえ 金平目地鞘細太刀拵	1腰	江戸時代中期～後期	
参考 作品		いいなおすけがぞう 井伊直弼画像	1幅	江戸時代後期	束帯を着用した折に太刀拵を佩いた姿を描く。
9		きんなしぢきくもんまきえきやいとまきだちごしらえ 金梨子地菊紋蒔絵鞘糸巻太刀拵	1腰	江戸時代後期	文政10年(1827)に12代直亮が光格上皇より拝領。
2. 変わり塗の世界—多彩な鞘塗—					
10		くろろしぬりいげたもんからくさまきえらでんきざみきやわきざしごしらえ 黒漆塗井桁紋唐草蒔絵螺鈿刻鞘脇指拵	1腰	江戸時代中期～後期	
11		いそくきびやくだんぬりきやだいしやうごしらえ 磯草白檀塗鞘大小拵	1腰	江戸時代中期～後期	
12		あおあかぬりわけみじんぬりきやだいしやうごしらえ 青赤塗分微塵塗鞘大小拵	1腰	江戸時代中期～後期	
13		きじろぬりきやだいしやうごしらえ 木地蠟塗鞘大小拵	1腰	江戸時代中期～後期	
14		しゅうろぬりきやだいしやうごしらえ 棕櫚毛塗鞘大小拵	1腰	江戸時代中期～後期	
15		くろろしくるみぬりこめきやだいしやうごしらえ 黒漆胡桃塗込鞘大小拵	1腰	江戸時代中期～後期	
16		きんからかわつみつきざしきや 金唐革包脇指鞘	1本	江戸時代中期～後期	
17		ぬのぼりぬのめじくろろしぬりだいしやうさや 布貼布目地黒漆塗大小鞘	1組	江戸時代中期～後期	
18		あおがいたかしほのしぬりこめきやだいしやうごしらえ・あいきがたごしらえ 青貝高皺熨斗塗込鞘大小拵・小さ刀拵	1腰	江戸時代後期	天保9年(1838)に12代直亮が將軍家より拝領した熨斗を用いて調えられたもの。
19	重要文化財	こしものやりなぎなたるいごしらえがきちやう 腰物鎗長刀類拵書帳	1冊	江戸時代後期	
20		つるあしかわまききやだいしやうごしらえ 鶴足皮巻鞘大小拵	1腰	江戸時代後期	
21		くろろいろくもがたぬりまづぼもんだいしやうさや 黒蠟色雲形塗松葉文大小鞘	1組	江戸時代後期	20の替鞘。
22		たち めい く に す け 太刀 銘 国資	1口	南北朝時代	20の刀身。
3. 刀装具の美—巧みなる金工の技—					
23		こいづつば めい やすちか 鯉図鐺 銘 安親	1枚	江戸時代中期	金工師・土屋安親(2代・1695～1747)の作。
24		ゆきわ・おうかもんだいしやうつば めい かまたじやうじゆ (かおう) 雪輪・桜花文大小鐺 銘 鎌田乗寿(花押)	1対	江戸時代後期	金工師・鎌田乗寿の作。
25		きくずだいしやうつば めい まきたつ 菊図大小鐺 銘 (大) 正辰 (小) 武州住正次作	1対	江戸時代中期	金工師・正辰および正次の作。
26		むしやかつせんずだいしやうつば 武者合戦図大小鐺 銘 (大) 藻柄子喜多河入道宗典製(花押) (小) 藻柄子入道宗典行年七十三歳製之	1対	江戸時代中期	鐺師・藻柄子宗典の作。
27		ぐりぼりつば ふち めい たかはしまつづ (かおう) 屈輪彫鐺・縁 銘 高橋正次(花押)	1組	江戸時代中期	金工師・高橋正次(初代)の作。
28		せんめんいのめなみわちらしぢだいしやうふち 扇面猪ノ目波輪散図大小縁 銘 筑山軒元茂(花押)	1対	江戸時代後期	金工師・大川元茂(初代)の作。

※すべて彦根城博物館が所蔵する井伊家伝来資料であり、重要文化財はいずれも彦根藩井伊家文書。

## 写真解説

\*番号は作品リストと一致しています。

### 2 黒蠟色塗鞘大小拵 1腰

総長 (大)106.8cm (小)63.5cm

桃山～江戸時代初期

当館蔵 (井伊家伝来資料)

井伊家歴代の指料を記録した「<sup>おんだいだいおんさしりょうちょう</sup>御代々御指料帳」に彦根藩井伊家初代<sup>なおよま</sup>の直政 (1561～1602) の指料と載せる1腰<sup>さや</sup>。鞘は艶のある蠟色塗、柄は黒漆を塗った鮫皮を敷き、柄糸を巻きます。鐔は、大刀<sup>たいとう</sup>に隅切の木瓜形鐔、小刀に楕円形の喰出鐔を合わせ、表面には細かい粒を無数に打ち出した魚々子を<sup>ななこ</sup>表して丸に橘の紋<sup>たかぼり</sup>を高彫します。鐔と同様の細工が鞘の表に付く栗形や返角、鞘尻の鐙、柄の両端につく縁と頭などの金具にも見られます。この橘紋は、彦根橘と通称される橘紋と異なり、実を囲むように5枚の葉がつき、枝先も曲がっていることから、定型化する以前の家紋と考えられます。



### 3 黒蠟色塗鞘大小拵・小さ刀拵 1腰

総長 (大)100.5cm (小)75.0cm (小さ刀)77.5cm

江戸時代中期～後期

当館蔵 (井伊家伝来資料)

「<sup>おんだいだいおんさしりょうちょう</sup>御代々御指料帳」に井伊家13代直弼<sup>なおすけ</sup> (1815～1860) の指料と記載する拵。鞘を黒蠟色塗で仕上げ、大刀と小さ刀の鞘尻は一文字状の切鐙、小刀は丸鐙とします。鐔などの金具類は、黒褐色の赤銅に魚々子を打ち、金で家紋の丸に橘紋を整然と配します。この形式は、幕末に江戸幕府の儀礼について著された『幕議参考』が示す、当時一般に認識されていた登城用の正式大小拵の形式をよく表してしています。3口全ての鐔と縁には、江戸時代中期の金工稲川直克 (1720～1761) の銘が切られており、<sup>そろいもの</sup>揃物として直弼以前にこの拵が調えられていた可能性が考えられます。



9 金梨子地菊紋蒔絵鞘糸巻太刀拵 1腰

総長 101.3cm

江戸時代後期

当館蔵 (井伊家伝来資料)

江戸時代、武家が太刀を用いるのは、主に儀礼の時でした。佩用の拵には、いくつかの種類があり、一般的には、飾太刀を簡略化した細太刀拵、衛府の武官や官職に就く者が腰にする毛抜形の意匠を柄に表した衛府太刀拵（毛抜形太刀拵ともいう）、そして江戸時代に調えられた柄および鞘の鞘口から中ほどまでを同色の組紐で巻く糸巻太刀拵があります。この太刀拵は、天皇家の紋である菊紋を鞘に表した糸巻太刀拵。井伊家12代の直亮（1794～1831）が、文政10年（1827）に將軍の名代として上洛した折に光格上皇から拝領しました。江戸幕府において、譜代大名筆頭の立場にあった彦根藩井伊家は、2代直孝（1590～1659）以来、將軍の名代を含め重要な役目を担っており、井伊家伝来の拵の中には、將軍家や朝廷からの拝領品が含まれています。



が腰にする毛抜形の意匠を柄に表した衛府太刀拵（毛抜形太刀拵ともいう）、そして江戸時代に調えられた柄および鞘の鞘口から中ほどまでを同色の組紐で巻く糸巻太刀拵があります。この太刀拵は、天皇家の紋である菊紋を鞘に表した糸巻太刀拵。井伊家12代の直亮（1794～1831）が、文政10年（1827）に將軍の名代として上洛した折に光格上皇から拝領しました。江戸幕府において、譜代大名筆頭の立場にあった彦根藩井伊家は、2代直孝（1590～1659）以来、將軍の名代を含め重要な役目を担っており、井伊家伝来の拵の中には、將軍家や朝廷からの拝領品が含まれています。

11 磯草白檀塗鞘大小拵 1腰

総長 (大)99.6cm (小)73.8cm

江戸時代

当館蔵 (井伊家伝来資料)

井伊家伝来の拵には、多様な変わり塗の鞘が見られます。変わり塗とは、表面を滑らかに仕上げずに敢えて凹凸をつけて文様としたり、植物の樹皮や実、動物の角、裂など多様な素材を組み合わせる漆芸技法です。この拵は、鞘の下地に不規則な皺を表す磯草塗を施し、その上に金箔を貼って透漆を塗る白檀塗の技法を合わせています。柄には、象牙の頭と銀の縁、鐔は銅（素銅）、小道具の小柄と筭には黒褐色の赤銅を用いるほか、腰に結ぶための下緒は浅葱と金茶の唐織を合わせるなど、1腰の中でさまざまな素材と色味が見られ、全体に華やかな趣を醸し出しています。



合わせるなど、1腰の中でさまざまな素材と色味が見られ、全体に華やかな趣を醸し出しています。



20 つるあしかわまきさやだいしょうごしらえ 鶴足皮巻鞘大小 拵 1腰

総長 (大)100.4cm (小)74.1cm

21 くろいろくもがたぬりまつぼもんだいしょうさや 黒蠟色雲形塗松葉文大小 鞘 1腰

総長 (大)75.8cm (小)56.7cm

江戸時代中期～後期

当館蔵 (井伊家伝来資料)

鞘に鶴の足皮を巻き、漆をすり込むように塗る摺漆<sup>すりうるし</sup>で表面を仕上げた拵。鶴の足皮を鞘塗に用いる例は、井伊家以外にも少数確認できますが、井伊家伝来の拵に施された鶴足皮巻は状態が良く、足皮を絶妙に配置することによって、皺が美しい文様を表しています。鞘の両端と下緒<sup>さげお</sup>を通す栗形<sup>くりがた</sup>には青角を嵌め、鐔<sup>あおづのはめ</sup>をはじめ、柄に嵌める縁と頭<sup>つか</sup>、目貫<sup>は</sup>、鞘に収める小柄と筭<sup>ふちかしらめぬき</sup>の小道具はいずれも鶴、あるいは松に鶴の意匠で統一しています。その一方で、替鞘<sup>かえさや</sup>には黒漆の雲形塗を施した後、緑の漆で松葉を描き、栗形にも松葉を表す。鶴も松も延命長寿<sup>えんめいちょうじゆ</sup>を象徴する動植物であり、大刀には延寿派の刀を収めるなど、本鞘、替鞘を含む拵全体と刀身で延命長寿を巧みに演出した作品です。



◀ 本鞘 (鶴足皮巻鞘大小拵)



替鞘 (黒蠟色雲形塗松葉文大小鞘) ▶

26 むしやかつせんずだいしょうつば 武者合戦図大小 鐔 銘 (大)藻柄子喜多河入道宗典製(花押) (小)藻柄子入道宗典行年七十三歳製之 1対

径 (大)8.2cm (小)7.9cm

江戸時代中期

当館蔵 (井伊家伝来資料)

武者と異形の者が入り乱れた合戦の様子を描いた大小の鐔。彦根の中藪で活躍した喜多川宗典が制作しました。宗典あるいはその門下の作品は、文様を立体的に表す高彫<sup>たかぼり</sup>と、金や銀、銅などの色絵<sup>いろえ</sup>をふんだんに使うのが特徴です。藻柄子とも号した宗典は、全国的にも有名な鐔師<sup>つばし</sup>で、宗典やその門下の作品は、「彦根彫<sup>ひこねぼり</sup>」と通称され、人気を博しました。

